

1, 日牟礼八幡宮について

- ① 日群之社・・・応神天皇6年(275)に応神天皇が近江行幸の際、御座所を設けて休憩された。その仮屋跡に 日輪の形を2つ見るという現象があり、祠を建て「日群之社」とした。・・・この現象を「幻日」と云うそうです。
- ② 比牟礼社・・・持統天皇5年(691)、藤原不比等が参拝して歌を詠んでいる。その和歌にちなんで、「比牟礼社」に改めたと伝わる。
- ③ 比牟礼と八幡宮の習合・・・991年、一条天皇の勅願により、宇佐八幡宮を八幡山の山頂に勧請して八幡宮を祀った。・・・現在の下社は遥拝社(1005年)であった。

*疑問1：藤原不比等の万葉和歌にある「八幡」は何なのか？ 300年の差がある。

「天降り^{あまふり}の 神^{かみ}の 誕生^{みあれ}の八幡^{はちまん}かも ひむれ^{ひもり}の杜^{もり}に なびく^{しらくも}白雲」

- ④ 和邇^{わに}氏・日触^{ひふれ}使主^{のおみ} という江州土着の豪族・・・「日触」(ひふれ)が転じたとする説もある。

日触使主(ひふれのおみ)

名前：日触使主(ひふれのおみ)【日本書紀】

丸邇之比布禮能意富美(わにのひふれのおほみ)【古事記】

応神天皇が近江行幸のとき、(日本書紀：応神天皇2年3月壬子の条)

娘： 宮主宅媛(みやぬしやかひめ)【日本書紀】、

宮主矢河枝比売(みやぬしやかえひめ)【古事記】

を見染めて后とした。

結婚して生まれた御子が「宇遲能和紀郎子」(うじのわきいらつこ)【古事記】

=菟道稚郎子(うじのわきいらつこ)【日本書紀】である。

応神天皇の皇太子となったが、兄の大鷦鷯尊(おほさざきのみこと)【日本書紀】、大雀命(おほさざきのみこと)【古事記】と、・・・後の仁徳天皇と皇位を3年間争い敗死する。→宇治天皇と書かれている書物(播磨国風土記)もある。・・・和邇氏と葛城氏の政争とも云われる。「山城国風土記」には：「もとは許乃國(木の国)というのが菟道稚郎子の宮があつたので宇治となづけた」と記している。

宇治神社・宇治上神社の二座に祀られている。宇治の平等院の川向の東側に神社あり

「菟道」とは「兎の通る道」である。和邇氏とは「ワニざめ」のことである。

「素兎」と「ワニ」で思い至る 神話は？・・・兎神(白兎神社)=ツクヨミの化身とも・・・

・・・兎は「宇佐」か？(推理)出雲族・大国主神との関係は？八上比売(最初の妃)の求婚の予言

・近江の息長氏と和邇氏の勢力争いと見る方もある。蒲の穂は蒲生野に通じるから。→

近江高天原説という学説もある。(紹介のみ)：天御中主命，多賀大社、倭国大乱。

王仁博士(和邇吉師)：菟道稚郎子の師匠・・・千字文・論語などをもって百済から来朝。

- ⑤ 応神天皇の近江行幸・・・八幡(松明)祭の起源か？・・・神社由緒書

- ⑥ 日牟礼八幡宮の神職は元は和邇氏の系統の 櫟井(市井・一井)氏 → 目賀田氏 → 岳？

⑦ 祭神について

主祭神：誉田別尊、息長足姫尊、比売神（宗像三女神）

境内社：天照大神・豊受大神（常盤社）、天宇受売命（宮比社）、大国主命（大嶋社）

宇加之御魂神（稲荷社）、建速須佐雄命・少彦名命（八坂社）、事代主命（恵比寿社）・・・
他に岩戸神社、愛宕神社などがある。

⑧ 琵琶湖 霊ラインをつなぐ 神々の話

若狭（籠神社＝元伊勢）→白鬚神社（猿田彦命） → 沖島（厳島神社＝宗像三女神）→ 大島奥
津嶋神社（大国主命・奥津嶋姫＝宗像三女神） → 日牟礼八幡宮（比売神＝宗像三女神）
→ 伊勢（天照大神、豊受大神、猿田彦命） （・・・元伊勢があれば元出雲もある。）

* 宗像三女神はスサノオとアマテラスの誓約（うけい）で生まれた神＝海族のシンボル

* 「宗像の子は住吉で、住吉の子は宇佐である。」という言葉から海洋民が連想される。

綿津見三神、宗像三女神、住吉三神は海の神（航海神）である。すべてオリオン座の三連星だとされ、三位一体で航海の目印だった。

* 大嶋奥津島神社の境内社に「日触社」がある。元大嶋神社は日牟礼八幡宮の場所にあったと伝わる。・・・だいたいこの辺りは大嶋郷であったのだから。・・・八幡大菩薩の意味は（神仏習合）

2、近江の古代和邇（和珥・丸邇）氏と安曇（阿曇）氏について

どちらも古代の海洋民である。ともに 九州地方を本拠地にしていた。

安曇氏・・・安曇川、安土（アドの地）、 遠くは、長野の安曇野、・・・籠神社＝海部氏＝安曇系
奴の国＝志賀島（金印）が本拠地＝志賀 → 滋賀 となった。

和邇氏・・・和邇浜、櫛井氏と同系列に小野氏（小野神社）、春日氏、柿本氏（人麻呂）→ 浅間大
社の宮司も和邇氏の子孫。本拠地：対馬の和邇津？三韓征伐、

日向三代神話：山幸（彦火火出見）と海幸：豊玉姫（八尋鰐）の出産がヤフキアズ

* 疑問2：聖徳太子はなぜ、小野妹子を 隋に派遣したのか。→ 海洋民の子孫であったから
息長氏・・・伊吹山で日本武尊と敵対する。 神功皇后を輩出する。 天日槍の系統か？

* 倭国とヤマト国と邪馬台国論争、・・・まだまだ迷走中

3、鏡王女（ががみのおおきみ）と額田王（ぬかたのおおきみ）の姉妹について

共に万葉歌人・・・鏡王女：藤原（中臣）鎌足の妻、藤原不比等の母・・・興福寺縁起

額田王：大海人皇子（海族を連想） から→ 天智天皇の寵愛

近江鏡の里の豪族「鏡王」の娘・・・父鏡王は壬申の乱で戦死している。（千僧供古墳群）

* 竜王町には天日槍の従者（技術者）が住んでいたという、鏡、弓削、須恵はその名残りである。

天日槍は、渡来神：垂仁天皇3年に渡来。但馬出石に住、草津穴村「安羅神社」祭神

【参考】垂仁天皇11→景行天皇12→成務13・日本武尊→仲哀天皇14→応神天皇15→仁徳16

4、今昔物語集の安義橋の鬼について

今は昔と云う書き出しで始まる。天竺・震旦・本朝の3部構成で巻第1から巻第31までの平安時代に成立した説話集である。・・・今昔物語集 巻第27 「近江国安義橋鬼喰人語 第13」に収録されている。・・・安吉郷 百済系氏族：安吉 勝（すぐり）・・・雪野山寺、倉橋部廃寺、千僧供古墳群がエリア
公礼八幡宮（吉士長丹）は白雉4年653年孝徳天皇の遣唐大使、封戸200（＝安吉郷？）と呉氏を賜うとある。
：今昔物語集は市立図書館にあります。映画にもなっています。→ 「アギ 鬼神の怒り」（1984年作品）

5、和邇の系譜は櫛井氏から目賀田氏へ・・・ついでに、九里氏や三井氏とも関係が・・・

・目賀田氏は近江守護佐々木六角氏の重臣で六老臣の一人に数えられている。目賀田氏の正確な系図は伝わっていないが、目賀田氏が歴史上に現れるのは、鎌倉時代から南北朝時代にかけてのことで、「比牟礼八幡の神主に補された目賀田信職・信音父子」の名がある。

・目賀田（五郎兵衛）信職（入道玄向）は元弘3年（1333）、足利尊氏の六波羅攻めに従軍して戦功があり、建徳元年（1370）信職に比牟礼八幡宮の神職が譲渡されている。

「徳治3年（1308）近江比牟礼八幡神社文書に一井中務太郎入道生蓮から目賀田女房（一井丞正観＝源氏女）に神職と大嶋郷の田畑が譲渡される・・・」さらに「一井正観から目賀田信職（藤原信職）に神職が譲渡された。（『鎌倉遺文』）とある。」・・・市（一）井氏から目賀田氏に相伝されたから、目賀田氏も櫛井氏の同族とするのが自然である。

・比牟礼八幡宮は、大嶋・奥津嶋神社の系譜を引くもの（大国主神・宗像女神を祀る）とみられ、海族（海神）の流れを汲む和珥（和邇）氏族の櫛井臣というのが目賀田氏の本来の出自である。・・・メカタは目形の意で、海人の風習で目の縁の入れ墨に由来したものか。海神族には胸形（宗像）という装飾もあった。・・・また一説には元々安土山が目賀田山と呼ばれていたのは、内湖に突き出た山（め潟）からきている。という。説もある。・・・いずれにせよ目賀田氏は和邇氏→櫛井氏の系統に繋がる。

・目賀田氏と安土城築城の関係

目賀田山 → 信長に引き渡し→現在の目加田（愛荘町の大字）に移住 → 信長が安土城を築城
六角氏→ 浅井長政→ 織田信長 →明智光秀 →山崎合戦で敗北 2万石没収 一族は離散流浪

・近江の目賀田氏一族としての三井氏

佐々木道誉の頃の佐々木家人に「藤原信良」があげられる。三井信良＝目賀田信良が三井系図にあげられている。目賀田信職の兄か？ ：近江国 目賀田庄に居住？ 目賀田山周辺

・戦国期には三井安隆（小脇城）・・・三井越後守高安・・・高利（豪商越後屋の家祖）

・水荃岡山城の攻防戦の主役となった「九里浄椿」の九里氏も目賀田氏と婚姻関係にあって和邇氏（櫛井氏）とつながってくる。・・・佐々木本郷氏（本郷神社・若宮神社） →九の里村 九里氏（九里館）

・他の城で「近江の山城を歩く」：中井 均・・・法華峰に上社：鶴翼山、 阿弥陀寺：北之庄城

六角氏一族には「八幡山 義昌」「八幡山 秀綱」という人物の名が見える。：『江源武鑑』（佐々木六角氏の末期4代の時代を日記形式で書かれた書物）全18巻20冊で構成。その中に六角義郷の事あり、六角義郷は秀吉に見いだされ秀次に仕えた人物。秀次事件により没落する。（佐々木氏郷・沢田源内著）
「天文8年（1540）2月8日：長命寺尼寺から出火し本堂に燃え移り、一字も残らず炎上する。」とあるのを見つけたが、これは、長命寺の観光案内をしていると必ず説明する「長命寺曼荼羅」という勧進に出てくる「穀屋寺」のことであろう。私たちは、「長命寺の火災は、永正13年（1516年）、六角高頼と伊庭貞隆の対立による兵火・伊庭氏の乱により伽藍が全焼する。現存する堂宇は室町時代から江戸時代初期にかけて再建されたものである。」と説明しているが、この火事はもう少し後の出来事なのだろう。江源武鑑は天文6年から元和9年（慶長一元和一寛永）までの記録である。

観音正寺が聖徳太子の創建とされるのも狭々貴山公が聖徳太子（厩戸皇子）の側近の秦河勝の一族愛智秦公と縁戚関係にあったからだろう。・・・聖徳太子創建と云われる寺院が近江には多い：例：百済寺 渡来系人々の信仰 →渡来系の人々が多く住んだのが近江である。

今は聖徳太子1400年御遠忌とともに最澄1200年大遠忌でもある。最澄は766年か768年の天平の

奈良時代の生れで、生誕地は瀬田川周辺か坂本と云われている。最澄の俗姓は三津首、俗名は広野といい、父親は百枝と伝えられている。「叡山大師傳」によれば三津首氏（三津が氏で、首は姓）は中国・後漢の孝献帝の末裔で、応神天皇の時代に近江国志賀郡に居地を賜り又三津首の氏姓を賜った。という。つまり、最澄も応神朝に渡来した渡来系氏族である。・・・近江国志賀郡とはよくよく海人に関係ある土地柄である。しかも「三津」とくる。津とは港の意味である。なお八幡宮と稲荷神社はもちろん日吉大社や上賀茂・下鴨神社も秦氏と強い縁で結ばれていることが分かる。秦氏と云えば養蚕と機織りである。養蚕から「オシラ様」が連想し白は白山比売（菊理媛）の白山神社となる。白山信仰と朝鮮の白頭山・「白丁」。秦氏は新羅系渡来人。だから百済系に追いやられた秦氏は民衆に溶け込んでいった。また白鬚神社（比良明神・猿田彦）と猿女（芸能の神）にも秦氏が関係しているのでは・・・・・・。

6、聖徳太子について・・・没後1400年ということで・・・

聖徳太子の虚像を作ったのは秦氏と藤原氏である。

蘇我氏から藤原氏への権力の移行。藤原不比等の「日本書紀」編纂の目的 → 聖徳太子を蘇我氏に滅ぼされた悲劇の英雄としてその役割を創作。・・・民衆の太子信仰：鎌倉仏教にまで影響を与えた。

蘇我氏の始祖：武内宿弥 のこと・・・海族（海部・尾張氏）、秦氏と八幡信仰（応神天皇）？

秦氏と太子信仰。・・・【疑問1】の答え：八幡とは応神天皇を指している。

7、近江の他の古代豪族・・・（近）淡海国造、安国造、三上祝氏について

桐原7郷：中小森村を中心に条里制が敷かれていた。・・・その中心が菅田神社。（近江八幡安土の神社）

熊沢蕃山の勉学の地（母方の祖父・熊沢守久）・・・小森氏、伊庭氏とも縁戚関係があった。小森城跡あり。佐々木系統か？

菅田神社・・・天目一箇神 = 菅田首の祖 （天目一箇命）の子が饒速日 * 注意



蒲生（物部）稲置の祖でもある。

御上山（三上山） 天之御影命と同一神 = 天津彦根命の子・・・三上祝氏：物部氏と同族

* 共に 鍛冶の神様・・・大岩山の銅鐸・・・倭国・物部郷の製鉄技術

安氏（安国造）は、野洲地域を支配していた。・・・三上（祝）氏は分流（ニギハヒ）

青銅器文化の担い手は、安氏。・・・円山・甲山古墳（安国造一族の墓域）

三上山は、藤原秀郷（俵藤太）のムカデ退治伝説でも知られている。・・・蒲生氏郷

日本武尊が妃・布多遲比売命（父は近江安国造）との御子「稲依別王」から犬上建部君が、

同じく日本武尊と布多遲比売命の子に仲哀天皇がいる。

安（野洲）本家は、壬申の乱で、大友皇子（弘文天皇）に付き敗戦後は、力を弱め、犬上君氏や建部氏にとって代わられます。・・・犬上君と建部の祖は、ともに「稲依別王」

【淡海国造】 安国造と同一の国造であると受け取られるが、別系統・・・・・・淡海氏とする。→ 瀬田・大津地域を本拠地にした → 後に 淡海安国造を併合したとも云う。

13代成務朝時に 彦座王3世孫の大陀牟夜別が淡海国造に任じられたとする。「古事記」によ

ると祖は「天押帯日子命」で、和邇氏、春日氏、小野氏と同系とあるので、海人の和邇族と同族。

・武内宿禰子孫のひとつである淡海臣と同族であるとか諸説あるが、蘇我氏と密接な関係を持っていたらしい。 * 国造の制度があったのは、古墳時代から律令制度以前まで

応神天皇の5世の孫（オオド）として26代継体天皇が登場 ！?

近江国高嶋郷で誕生→のち 越前にて成長 ……近江豪族（和邇氏、息長氏）の製鉄技術や尾張連（海部）の勢力を背景にヤマトに入る。……仁徳王朝 → 継体王朝へ は物部から蘇我へ ……上宮記（かみつみやのふみ）逸文：記紀以前の書 =蘇我氏一族の歴史書—藤原氏が抹殺。（乙巳の変645年）ちなみに、聖徳太子は継体天皇の曾孫です。……「上宮記」をもとに藤原氏が聖徳太子をスーパースターにした。（=日本書紀）

* 蘇我氏と対立した物部氏について：神武天皇よりも前にヤマト入りをした饒速日（ニギハヤヒ）命が祖先と伝わる、登美夜比売（とみやびめ：古事記、）を妻とし物部氏の初代の宇摩志麻遲命をもうけた。登美夜比売（又は長脛姫・三炊屋媛）というはナガスネヒコ（長脛彦）の妹なり。……長脛彦は神武が畿内に入るのを邪魔した者。物部の饒速日又は宇摩志麻遲命が長脛彦を裏切り神武を助けた。

長脛彦は「徐福（伝説）」と関係が？ →アラハバキ神 =荒脛巾神社 ……東日流外三郡誌

*ニギハヤヒ=天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊（アマテルクニテルヒコアメノホアカリクシタマニギハヤヒノミコト）→ 出雲族か？ 元伊勢=籠神社祭神 → ニニギよりも先に天孫降臨していた神で天磐船に乗り「十種の神宝」を持ってきた。=石上神宮（物部氏）七支刀

又、彦火明命は宗像の瀬織津媛（市杵島姫命とも云われる）を妻にした。……籠神社：海部氏系図

大歳神=饒速日命である。物部氏の祖・饒速日命は、物部氏滅亡と共に消されていった……

【高田崇史】小説家：伊勢神宮には皇女が斎宮として赴きますが、なぜ女性が赴くのでしょうか？まるで嫁入りのようです。元々、天照という男性神がいたものの、その神が殺され、妻であった天照大神が祀られるようになったのではないかと。その天照という男性神はニギハヤヒのことで、のちに大和朝廷を作りあげる人々に殺されたのではないかと推測されています。天の岩戸隠れという物語は、殺されたニギハヤヒを岩戸に葬り、当時の様式で葬儀を執り行ったことから来ているのではないかとのことです。その後、大和朝廷を作り上げた人々は、ニギハヤヒの妻だった女性を祀り上げ利用しました。これがいわゆる卑弥呼(日の巫女)ではないかと。太陽神「天照」の巫女だから、ヒミコというわけです。古事記、日本書紀にはなぜか邪馬台国や卑弥呼のことが出て来ません。これについても諸説ありますが、自分たちが利用し、殺した存在だから、載せられなかったとも考えられます。……「QEDシリーズ」「古事記異聞シリーズ」等

- ・三輪山の大神主神とは？=ニギハヤヒ のことだと云われている。 ……大国主(大己貴神)の幸魂・奇魂 と説明。
- ・オオモノヌシ：多くのモノの主・「もののけ姫」を連想、*モノ(物)とは「モノノケ」のモノ(鬼・霊的存在)の気配を指す。
- ・八千矛神=兵主大社 ……日吉から白蛇に姿を変えて亀の瀬に乗り琵琶湖を渡る。上陸後は鹿が守りこの地に着く。
- ・箸墓は倭迹迹日百襲姫命の墓？ 大神主は蛇神だから海神でもある。

8、「鬼滅の刃」から隠された歴史のメッセージを読み解く=神話との共通項

「鬼滅の刃」で鬼殺隊の「蛇」と云えば「伊黒小芭内（いぐろおばない）」であるが日本神話では大蛇の「化け物」としてのヤマタノオロチ。……記紀が描いた日本の鬼の原像

大和政権からみて「鬼とは」……化外の民、まつろわぬ民：草薙剣=民草を薙ぎ倒す剣である。

土蜘蛛……那田蜘蛛山での炭治郎達の鬼殺隊との戦い → 夷（鬼）を以て夷（鬼）を制す。

酒吞童子、羅城（生）門の鬼……桃太郎の系譜に連なる「鬼退治の物語」：節分（追儼）

「鬼滅の刃」の鬼達はなぜ、藤を嫌うのか……藤は藤原を表す。闇に闇をぶつける日本の歴史
平安貴族を苦しめたもの……雷、疫病、災害等……退治するか、鬼・怨霊を封じる。

上賀茂神社：賀茂別雷神　下鴨神社の祭神はタケツノミ（賀茂建角身命）＝八咫鳥である。

タケツノミの娘：（賀茂の玉依比売）が大山昨神（オオヤマクイ）＝火雷神の化身を夫として産んだ子が賀茂別雷神である。・・・また、オオヤマクイは松尾神社にも大山昨神と市杵島姫命として祀られているが、古事記には「大山昨神は日枝山に坐し、また松尾に坐して鳴鏑矢を用つ神」とある。そして、松尾大社を創建しているのは「秦氏」であることにも留意。京都・太秦の地は秦氏の本拠地であった。・・・秦氏は白山神社との関係や芸能とも関係がある。また、八幡・稲荷しかりである。

・竈門炭治郎は炭焼きであり、製鉄関係者。父は漂泊の芸人（傀儡子）とみる。

・鬼舞辻無惨は平将門がモデルであり、炭治郎は藤原秀郷がモデルである。・・・納得

・TV アニメ「鬼滅の刃」は「遊郭編」である。そこで活躍する柱は、宇髄天元である。彼は忍者の出身である。・・・実は「聖徳太子」も大伴細人を「志能便」として使っていた。他に秦河勝と服部一族も志能便として登用していた。秦河勝は聖徳太子のブレーンの存在であり服部氏も秦氏の一族であった。：そしそれが事実なら聖徳太子は甲賀・伊賀の忍者の創設者である。余談だが、

・ガイドで案内する「伴伝兵衛・伴庄右衛門」の初代は伴太郎左衛門尉資家であり。元は大伴→伴

本能寺の変で初代は討死した甲賀武士。・・・大伴細人の流れをくむもの

・豊臣秀次公にも「服部一忠＝服部小平太」という、服部一族の家臣がいた。

服部小平太は、今川義元に一番槍をつけ、毛利新介（良勝）が首を打ち取った。

毛利新介は本能寺の変で討死。服部一忠は秀次事件に連座して切腹している。

小平太の弟：小藤太も本能寺で討死。小平太の子の勝長は紀州徳川家に仕える。→後の御庭番か？

吉宗と一緒に和歌山城から江戸城に入ったものとして「広敷伊賀者」「伊賀御庭番」の名が記録に見える。

・伴伝兵衛（2代目）：明暦年間　江戸日本橋「近江屋」の主人と柳川藩主立花左近将監忠茂（2代目藩主）との関係・・・「近江屋」の「松飾り」が有名な話です。・・・柳川藩は　最初は　八幡堀や山下町を作った「田中（九兵衛）吉政」が石田三成を捕らえてもらった領地であった。（町づくり等で土木の神様と云われた）・・・2代で改易となり、その地に立花宗茂が入る（回復）。

以後明治まで続く。・・・水郷・柳川の川下りは有名。・・・北原白秋の故郷でもある。

* 田中吉政と山形屋初代　西川仁右衛門の関係：田中吉政が図面を引き、仁右衛門が現場を指揮して最初から八幡の町を「商人の町」として作っている。だから城主を失った町衆が奮起して、行商に出て行ったということだけでなく、なるべくして商人町は出来たのである。・・・最近、八女市にある「田中吉政研究会」の方と Facebook で交流ができ情報交換などもしている。

【西川家】家伝では・・・永禄年間に蒲生郡（南）津田村に居住した、元六角家の家臣「市往右兵衛吉久」を祖とし、八幡城下に移転し「西川」と改めた。とある。

本家：西川右兵衛家、吉久の子の吉春の次男が分家して：西川傳右衛門家・屋号・松前屋（近江）、住吉屋（松前）

養子（旧姓木原氏）：西川利右衛門家：屋号・大文字屋一分分家：西川庄六家

* 元越前朝倉氏家臣：西川家の養子＝木原勘右衛門数吉の子・数政が利右衛門（初代）―長男利右衛門（2代）重数、次男：西川庄六（分家）、四男：西川仁右衛門（分家）：近江屋？

分分家：西川仁右衛門（西川甚五郎）家：屋号・山形屋　・・・とする資料もあるが、・・・ある資料には大工組西川家とある。＊＊別系統か？分からなかった。知っている人がいたら教えてほしい！

「先義後利榮 好富施其徳」(義を先にし、利を後にすれば栄え、富を好しとし、其の徳を施せ)・・・商いは目先の利益よりも遠きを見てすることが大切であると教えた。この考えは荀子が説いた「先議而後利者榮」の影響を受けたものと考えられる・・・江戸時代、享保年間、京都で呉服商をしていた「下村彦衛門」は「大文字屋」という屋号で商売をしており、「先義後利榮」の家訓を同じように残している。調べたが関係性は無い様だ。京都伏見で下村彦右衛門正啓の創業した呉服商(享保2年)は後に「大丸」百貨店となったが、先義後利は社訓として存続。

・・・津田が出てきたついでに、津田つながりで、平親実(親真)(津田親実・織田親実)について・・・9, 織田信長の先祖について: 織田家の系譜を考察する。

* 織田信長に代表される戦国大名ー織田氏が越前国丹生郡織田荘を本貫とする豪族から起こったことは、大体の学者の一致する見解となっている。問題はそれ以前であるが、弟の織田長益(織田有楽斎)が幕府に提出した武家家伝(系図)では、「平清盛一平重盛 一平資盛一津田親実・織田家始祖・・・信長」とある。

平資盛の愛妾を津田庄に匿い、後に津田豪族の後妻に入った。その時既に「親実」は生まれていたもので、津田氏の養子にした。

織田一族の発祥地は越前国織田荘(現・福井県丹生郡越前町)にある劔神社である。本姓は藤原氏(藤原北家、のちに桓武平氏資盛流を称する)。実際は忌部氏の流れを汲むとされる。・・・信長は藤原氏も名乗っているが、最終的には「平氏」とした。

* 資盛が親真の母への餞別として詠んだという「近江なる津田の入江のみをつくし、見えぬも深きしるしなりける」という和歌が伝わっている(「織田系図」)・・・母の名と出自は分からない。

その辺の所を、ある作家はこう書いている。・・・『その後の織田一族』 杉本苑子 より索引

「平清盛の孫、資盛は平家一門が都を捨て西海へ落ちようと言う瀬戸際に、一人の愛人を近江の津田の庄に身を隠させた。

その愛人に資盛の子が生まれていたからである。子は男の子。女の名は伝わっていないが、一説に三井寺一条坊の阿闍梨真海の姪のいう。とにかく、彼女は資盛の指示に従い近江津田の庄に身を寄せた。だが、女手ひとつ。資盛も戦死、平家一門も滅びたとあって、津田の庄の土豪に求婚され妻となった。このとき資盛の子も共に津田の家に入り継父に養われ育った。この少年を越前丹生郡織田の庄、織田神社の神官斎部某が養子にもらい受けた。少年は名を親真と名乗り、彼が織田一族の祖となる。そして彼の子孫常昌が神社の名、織田を姓に冠して織田を名乗り、越前守護斯波義重に見出され武士としての織田家を築く。」

* 近世大名の織田氏の出自を平氏とする説においては、平家の子孫が近江津田庄(現在の近江八幡市)に逃れ津田姓を称し、その末裔がのちに越前に移住し織田氏となったとされるが、確証はないので、「伝承」としている。・・・また織田氏の直系から見て庶流に当たる一門は津田氏を名乗り、主家との厳格なる区別を付けていた。例えば、織田信長の弟織田信勝(信行)の子津田信澄などが有名である。

* この津田氏は、藤原氏・忌部氏の系統が有力とされている。・・・祭祀をつかさどる氏族として中臣氏や忌部氏は古代から存在した。

* 書籍やネットの中でこの津田(平姓)を苗字とする織田一族について「尾張国内で織田を名乗る城主の内、家格が上の嫡流家以外は津田に苗字を改めさせ、織田を名乗ることを禁じた」と、紹介されたものも幾つかあります。ですが、その出典についてはどこも触れておりません。江戸時代の徳川ー松平の様なものであるとも思えるのですが、徳川のそれのように御三家・御三卿と言った明確な家系別にはなっていないようです。

・・・このように、南津田には、応神天皇のころから深い歴史を持っているのです。・・・

10, 近江八幡の城について・・・ここからは付け足しみたいなものです。

南津田町の八王子神社を登ると、「石舞台」があります、昔の古墳群の跡らしいです。また少し上がると「南津田城」の跡(石垣)に出ます。もっと登ると八幡城の「出丸」に行き付きます。南津田の真念寺の住職は現在、「有村氏」です。：井伊大老の暗殺に関係した薩摩浪士「有村次左衛門」の関係者の子孫。真念寺の向かい側に「津田親真」の顕彰碑が建立されている。……でも南津田城は載ってないんだよね。

真念寺由緒：文明2年(1470)蓮如上人が江州の南津田に来られた時、村人がこぞって蓮如上人の説法を聞き、浄土真宗の教義に帰依して、仏法を聞法する道場を建立された。蓮如上人が建立した道場を「惣道場」とし、惣村の小林又左衛門(法名長春)が道場を守った。その後、元亀年間、信長との11年間にわたる本願寺合戦では、嫡子又左衛門が山科本願寺攻防戦で戦死、次男又二郎は堅田で戦死、三男の慶正が道場を嗣ぐ。五代慶春従軍し戦死。六代慶善の時、教如上人に帰依し大谷派に属す。……村人が「講」を通じて石山合戦や赤野井別院での合戦に参加している。

近江八幡観光物産協会が「市内に点在するお城」を紹介：番号はHPのママ。……できれば注釈・解説がほしい。

- 1, 八幡山城 宮内町 2, 浅小井城 浅小井町 3, 宇津呂館 中村町 4, 岡山城(水茎館) 牧町 5, 沖島尾山城 沖島町
- 6, 沖島頭山城 沖島町 7, 沖島坊谷城 沖島町 8, 長田城 長田町 9, 小田城(高島氏館) 小田町 10, 北津田城 北津田町
- 11, 北之庄城 北之庄 12, 久郷屋敷 上田町 13, 倉橋部城 倉橋部町 14, 小森城 中小森町 15, 金剛寺城(金田館) 金剛寺町
- 16, 田中江城 田中江町 17, 谷氏館(友定城) 友定町 18, 長光寺(瓶割城) 長光寺町 19, 西宿城 西宿町 20, 野村城 野村町
- 21, 船木城 船木町 22, 本郷城(久里城) 金剛寺町 23, 馬淵城 馬淵町 24, 牧村城 牧町 25, 円山城 円山町
- 26, 安土城 下豊浦 27, 観音寺城(佐々木城) 石寺、宮津 28, 香庄館 香庄 29, 金剛寺城 慈恩寺 30, 常楽寺城(木村城) 常楽寺
- 31, 平井館 下豊浦

* 以前に、研修部会で市内の「お城」講座をされたが、ほとんどの城については分からなかった。再度、誰か講師で説明できる方をお願いしたい。(要望) ……安土城・八幡城・長光寺城・水茎岡山城・観音寺城は除く。例えば、丸山城(円山城)なら六角氏の支流(氏綱が西条氏を名乗り)その「西条氏」が城砦を作ったとある。……その西条氏の子孫は遠州・頭陀寺城の城主である「松下加兵衛之綱」であり、羽柴秀吉の最初の主人である。また織田信長は安土城ができるまで近江逗留中は木村城で過ごした。その木村城は、秀次の家臣で事件に連座して切腹した「木村常陸介重茲」とはどのような関係なのか等々……ほとんどの市内の城は佐々木六角氏と関係のあるお城だろうが、織田信長とも関係するお城もあるので…… 近代相撲の発祥は安土からということだが、長田町の近くには「力士塚」もある。安土時代には処刑場の跡(安土問答での法華衆2人の石碑)である「シガいの森」も今は心霊スポットになっていることなど……また豊臣秀次公の謀殺理由と秀吉の残虐性。絶えたはずの秀次公の血筋・子孫の話など、お鍋の方等 まだまだ言い足りないのだが、テーマから逸れすぎるので一応ここで終了させていただくことにする。(VG 西川)